

## 「進化の産物としてのヒトの本性」

青 木 健 一（人類学教室）

テレビには、奇怪な生き物がしばしば登場する。たとえば、空想科学物語の怪獣がそうである。J. B. S. ホールデーがかつて指摘したように、巨大な鳥は、空を飛べるはずがない。また、巨大な昆虫は、飛べる飛べないより以前の問題として、おそらく呼吸困難で死んでしまうであろう。だが、このような空想上の動物よりさらに非現実的なのが、ホーム・ドラマなどの主人公達ではないかと思う。誰に対しても惜しみなく親切でありうる人物のことである。ホーム・ドラマが嫌いな理由の一つは、こういう人物の言動を見聞きしていると、劣等感に襲われるからである。だが、それと同時に、ヒトの行動の進化を研究しているものとして、何かしっくりしないからでもある。

私が所属する教室では（自然）人類学が研究されている。異論もあろうが、人類学の目標を一口で述べるならば、「進化の産物としてのヒトを理解すること」と言えるのではなからうか。ここで「進化の産物としての」と断わった理由は、医学、心理学、社会学、経済学や文学のように、やはりヒトを理解しようとする学問分野と区別するためである。ヒトにはいろいろな側面があるが、私自身の関心はその行動にある。

ヒトが進化の産物であるならば、その行動が制約されていて当然である。たとえば、誰に対しても惜しみなく親切でありうる人間は、進化理論に矛盾する存在である。なぜならば、自らが行った親切に対して何のお返しもなければ、損をするばかりだからである。親切心が遺伝決定されており、さらに損が生存力や繁殖力の低下に結び付くならば、このような性行をもつヒトの数が世代とともに減少し、しまいにはなくなってしまうはずだからである。

行動が遺伝決定されているということの意味は、

環境要因とか文化要因が原因となって、行動の大幅な個体差が誘発されないということである。逆に、個体差が見られる場合、その大部分が個体間の遺伝的な違いに基づいているということである。また、行動の遺伝決定には、その行動に関して親と子が似るという別の意味もある。（厳密には、この二つの意味を区別する必要があるが、ここでは立ち入らないことにする。）

では、遺伝的に決定されていないのならば、親切などの「利他行為」の存在が説明できるであろうか。たとえば、このような行為が美しいと感じられるため、文化的に伝承されているのかもしれない。我々は、誰に対しても惜しみなく行われる親切を確かに美しいと感じる。だが、このような行為がヒトの生物学的な本性に反するならば、なぜそのように感じられるのであろうか。実は、ヒトの行動の進化を論じようとするとき、しばしば直面するのが遺伝と文化の関係の問題である。

念のために付け加えるならば、いろいろな生物で、遺伝決定されているとしか考えられない利他行為が観察されている。利他行為とは、自分は損をして他者に利益を与える行為である。だが、決して無差別な利他行為ではない。たとえば、密蜂の働き蜂が巣を守るために侵入者に襲いかかる行動は、明らかに利他行為である。その特徴は、近い血縁関係の個体に向けられているところにある。すなわち、縁者びいきをしているのである。また、サルの中間のヒヒなどでは、お返しを期待した利他行為が報告されている。この場合、赤の他人も受益者になっているらしいが、自らの行為に対してお返しがある点が重要である。実際、この二種類の利他行為の存在は、進化理論と矛盾しない。

さて、話を文化に戻そう。文化とはなんであろうか。「学研国語大辞典」によると、それは「人

間が、その精神の働きによって地上に作り出した、有形・無形のものすべてで、学習によって伝承してゆくもの」である。もう少し一般的な言い方をすれば、文化とは模倣によって個体から個体へ伝達される行動およびその行動の産物、と定義できるのではなかろうか。ここで重要なのは、両親から子へ（卵子と精子を介して）遺伝情報が伝達されるのと同様に、個体から個体へなんらかの文化情報が伝達されるという点である。

そもそも、文化はなぜ存在するのであろうか。ほとんどの動物で、行動は遺伝決定されているか、あるいは学習による修正が可能であっても、一代限りの修正に過ぎない。ヒトの場合、模倣学習による行動の伝承があるばかりか、行動決定におけるその比重がかなり大きいようである。ヒトの系統における文化の起源の問題に関する答えが、すぐに得られるとは思えない。だが、ヒトの行動の進化を理解しようとするならば、どうしても取り組まなければならない問題である。以下、この問題に関する考察を述べて脱稿することにする。

文化の起源は、言語能力の進化と密接に関係しているに違いない。なぜならば、言語を持つと持たないでは、情報の量と質に格段の差が生じるからである。ところで、現代人では幼少の頃から言語機能が発達し、5歳までには十分話せるようになる。また、論理的思考力のように比較的高い年

齢で完成する能力と異なり、ほぼ思春期を過ぎると新しい言語の獲得が困難になる。たとえば、外国語のネイティブ・スピーカーにもはやなれない。言語機能が早い時期に発現することには、なんらかの意味があるのではなかろうか。生存上重要な情報を親から小さい子へ伝達するために言語能力が進化したと考えるならば、理解できないでもない。現在、スタンフォード大学のM. W. フェルドマン教授と共同でこの仮説について研究しており、幾つかのモデルの理論的な解析からこれを支持する結果を得ている。

次に、遺伝情報は母親と父親の両方から子へ伝達されるが、多くの動物では、文化情報は母親だけから伝達される。その理由は、父親が精子のみを寄与し、子育てに参加しないからである。そのため、文化情報は遺伝情報に圧倒される傾向にある。もちろん、親子関係にない個体間でも文化伝達が見られるが、文化の起源の問題にあまり影響しないことが分かっている。このような状況では、遺伝決定に取って代わって文化決定が出現することの難しさが、直感的に理解できるのではなかろうか。したがって、想像を逞しくするならば、ヒトの系統で文化と言語が発達した背景には、両親による共同育児が前提条件としてあった、と考えられるのではなかろうか。